

所信やを、順序を立て、分り易く述べるといふのが主要なる目的らしい。従つて書中往々獨斷的の誹を免れ得ぬ點や、各部に聯絡を缺ける所があるのは甚だ遺憾である。例へば靈魂不滅の論證百十一頁以下及び二百五十九頁以下)の如きは前者の例であつて、書中本論の前半と後半哲學上の諸説といふ部分との統一的聯絡を缺いて居る如きは後者の一例である。

要するに我々は普通に哲學概論とか綱要とか云ふ名稱で世に行はれて居る書に對するのと同じ態度と期待とを以て本書に臨むならば少なからず失望せざるを得まい。然し著者が大膽に自己の所信を發表し、又成るべく平易に説明せんとせる努力は感服すべきものと云はねばなるまい。東京 洛陽堂發行。定價壹圓拾錢(勝部謙造)

現代批判

文學士 紀平正美外三氏著

『體驗すること』、批判すること』を、離して考へ得られたいやうになつたのは、現代人の生活上の特徴である。言ひ換へれば吾人の生活は體驗の自照、即ち批判に盡さる、「現代批判」は斯の如き精神を以て現代に住せんとする吾人の生活の表現である。吾人は飽くまで感性を鋭敏にし、理性を透徹せしめ、以て全一に生きることを自己教養の理想とする』ことを標語として現はれた「現代批判」第一輯は、紀平正美氏の「批評の意義」を冒頭に、土居光知氏の「藝術的形象と流動」、田部重治氏の「デイ・プロファンデスに現はれたるワイルドの思想」を、最後に稻垣末松氏の「露園思想家の見たる哲學の現在及將來」の譯を編んだものである。就中、

土居光知氏の研究は量に置いて最も優り、且つ此種美學研究に、近來になき重味のあるものなることを特記するに憚らない。之と并んで田部氏のはポヒュリアなワイルドに、一種の見解を立てゝある點に於て、世人の興味を喚起すべき好箇の讀物たるを認めないと思ふ。紀平氏のもの、批評の意義に就て、批評の本質たる破邪的意義は、自我の確立、自己の哲學を待ちて始めて、顯正の實を擧げうべく、徒に批評の爲めの批評即ち氏の言葉を借れば「樂屋落ち」、廣く言へば詭辯の架空を廢しうべきを啓蒙せる點、特に「現代批判」の標語たる體驗の自照を道破せるを、心強く感ずる。稻垣氏のは第二輯に互るを以つて茲に説かず。従つて、茲には土居田部二氏のものに批判するに留める。

土居氏の「藝術的形象と流動」の考察は、氏自らの自信することろによれば藝術の本質を捕捉するに最も適切なる見地に立つものであると云ふことだ。土居氏は「活動」をベルグソンの説に従つて宇宙の本體と認めてゐるかどうかは判らない。併し少くとも「藝術的形象」との交渉に於ては、ベルグソンの流動と形象との關係に對する批判を示さない限りに於て、ベルグソンに従ふものと見ねばならない。而してかく認容せられたる流動を、氏は藝術的活動の根本的事實と見做すことには躊躇してゐないやうに見受けられる。遮英、之等總ては、「藝術的形象」の理解に懸る。藝術的形象の理解は亦、藝術的形象と然らざる形象即ち外的形象との相違を、主觀の見る性質の上に考へなければならぬから、此の見る性質の理解と離るべからざる關係に立つ。而して藝術的形象と密接なる關係に繋がる見、ことを直觀と解し、主觀の内面的世界を

通じて形象が外界に表現せられるものとなし、印象の内面的發展を考ふるなど、尙其他多くの點で、土屋氏は「直觀の成立、直觀の内的表現なる理由」を不明とし憚焉たるものがあるやうではあるが、大體に於てクローチエの所説を捧じてゐるものと斷ずるに難くはない。

氏の此論文に於て企てた所は、自稱の通り藝術本質の闡明にある。此目的より又本論題よりすれば流動が如何にして藝術的形象となるか、或は之を轉換して、藝術的形象は如何にしてよく流動たりうるか、若くは廣く、現實より藝術創作の過程或はその轉換等、藝術と人生の關係は蓋し主要論旨だらうと忖度する。

それにして中心問題とするところは、與へられたる資料としての現實が、獨立自律の統一體たる藝術となる過程に於て、如何にして彼の見ること——直觀が、形象——表現となるかにあると思ふ。氏がクローチエを捧じつゝも此點に於て、唯不安を抱くのみにて進んで之を批評することなしに、主觀の見る力々藝術的活動の本質となし、且つ印象と云ふ主觀的要素を高唱し乍ら、其等を惹起する主觀言ひ換れば創造的自我は如何なるものであるかを明瞭にしてゐないのは龍を描いて晴を點じえないものゝ憾みがある。

従つて、ギリシヤの彫刻と日本の藝術の特徴を印象の純一に覺め、又アポロ式藝術とディオニソス式藝術との對立を説くにあたりて用ひたる周匝なる論議、グロテスクの美に對する特殊の見解、并に美を外的存在に非ずとなす卓見等に對しては深甚なる讃同を表するものであるが、中心に潜在する不備に對しては尙謙焉たら

ざるをえない。

創造的自我の如何なるものなるかを承知しえない。「見ると云ふことが肉眼を以つて對境を寫すのではなく、感覺を通じて與へられたるものゝ内面的展開である、質的統一である」とすると氏が説き、それは「精神の統一の流動であり實現である」と云ふのを聞いても、僕には徹しかねる。のみならずか程に長い論證なるに拘らず、研究の中心問題の究明に資することの尠少なるを見れば、聊か隔靴搔癢なきをえない。藝術的形象が他の形象と異なる所以、流動を流動たらしめざる藝術的活動、これらは自ら樞樞たる背景に沈むのは止むをえないことだらう。

最後に、僕はベルグソンの流動が、どうすればクローチエの直觀となり表現となるのかなどと氏の論文を読みつゝ妄想した愚を告白して置かう。

「デイ・プロアンチスに現はれたるワイルドの意思」に就て田部氏はデイ・プロアンチスの價値を高唱してゐる。それは「諸種の問題を暗示する點に於て、彼の發展して行く内部徑路を最も明晰に表示する點に於て、人類の等しく取るべき究極の方向を適切に指示する點に於て、そしてそれが亦藝術的生活たることを斷ずる點に於て」である。Hending Gaoiの陰慘なる、彼の言葉によれば「暗き絶望の洞窟」に囚はれたる生活が、華麗なる向日葵を冠し、美と青春とを銜誇せし生活に比して如何なるものであつたか。言ふ迄もなく、突然此の轉變を將來したかの様な偶然の事件も、彼の從來の生活並に思想の傾向よりせば當然のことである。

田部氏のデイ・プロアンチスに於て辿つたワイルドの思想は、

人類の思想の中で最も意義あるものゝ一つには相違ない。然し乍らその意義は何處に在るかは大に考察を必要とする。今茲に輕佻なる生活を遂つてゐたものが、常軌を逸した其の放縱、街誇若くは幻影より倏忽にして世人の指彈するところとなり峻烈なる社會的制裁の下に繋がれ遂に淪落の淵に沈んだとする。そして彼は絶望悲歎し、前非を悔いて懺悔恥産し、悔後の情轉を大切なるものあり、死なんとする鳥の悲調を傳へたとする。これを以つて其人の心情は、「人類の取るべき究極の方向」を適切に示したものと認むべきであらうか。言ひ換れば、個人が社會的制裁の下に只管戦慄畏縮せるを最も價値ある人類の狀態と見做すべきであらうか。

又法律の強制力を實證し國家の權力を顯揚しえたる點に於て、個人の懺悔悔後を嘉し、それよりして其個人を憐憫するのは、吾人の大なる喜びであるだらうか。ワイルドを此意味に於て評價すべきであらうか。否、否！僕はワイルドを誣ふるに之より甚しきものあるを知らない。此の常識的見解ほどワイルドを曲解し彼の價値と獄中生活を無意義にし、引いてデ・プロファンダスの思想を冒瀆するものはあるまい。

デ・プロファンダスの思想並にデ・プロファヂスそのものを、他の諸作を通じての思想並に他の總ての作物どの相對的見地より見るか、或は之を引離して若くは絕對的見地より測るかによつて大に其評價を異にすると思ふ。デ・プロファンダスはワイルドの一つの作なる以上、勿論その全體の上から取扱はるべきものであるが、ワイルドの如き特殊の個性、特異の生活者の場合であり、一見がらりと變つた様に見けられるデ・プロファンダスの場合

であるから、特に此標準を立てることを肝要とする。結果は次の様に抽き出されるから。——前者の見地よりせば、デ・プロファンダスの思想は特異なものでもなければ、異つたワイルドを示すものでもなく、虚と實との變換ではない。然るに後者の見地よりせば、此思想こそ特異なものであり、一新せるワイルドの面目を現はすものであり、從來の虚が實となり、幻の消滅だとする。田部氏の見地は果して孰れにあるであらう。危い哉後者の見地は常識的見解と提携し易く、ともすればワイルドを誣ふることがあるを附記して置かなければならない。(園賴三)

寄贈書籍雜誌

科學の價値

文學士

ボカンカレ著
田邊元譯

岩波書店

認識の對象

文學士

リツケルト著
中川得立譯

同

國民道徳要領

文學士

吉田靜致著
藤本慶祐共著

東京寶文館

哲學雜誌、心理研究、東洋哲學、六合雜誌、東亞之光、第三帝國、六條學報、學校教育、内外教育詞論、普通教育、小學研究教育研究、教育學術界、教育界、新公論、兵庫教育、静岡縣教育時報、滋賀縣教育會雜誌、愛知教育雜誌、愛媛教育、都市教育、信濃教育、宮城縣教育會雜誌、藝備教育、少年俱樂部、